

医療ルネサンス

No.5801

性同一性障害

4 / 6

子どもの対応は早めに

くらし 家庭

西日本の小学3年生(8)は、言葉も上手に話せない頃から、男児なのに髪を伸ばしたががり、スカートをはきたがった。

保育園から帰ると、「みんなが男の子だと言っている」と泣いた。

女の子として認めてほしい、との願いにどう応えるか。両親は精神科医に相談し、「願いを受け入れつつも、周囲に違和感を持たれない落としどころを見つめよう」と決めた。

家庭では、女の子のパジャマやパンツで過ごしたが、保育園で着る水着は、本人が希望したフリル付きワンピースでなく、ピンクでもシンプルな上着と半ズボンのセットにした。

小学校に入学すると、制服やトイレなど男女を意識せざるを得ない場面が増えた。クラスの児童が音楽や体育で移動する際に、わざ



「女子の輪に加わり、念願のお手紙やシールの交換ができるようになった」と話す母親

と1人遅れてこっそりと男子トイレの個室に入った。男女と一緒に遊ぶ機会は減り、1人で本を読み、絵を描く毎日。担任の紹介で岡山大病院への通院を始めた。

2年生になると、提出するプリントに、男らしい自分の名前を書けなくなつた。授業参観では、自己紹介の場面で名前を言うのが嫌で机の下に隠れた。

両親は、女兒として通学させる決断をした。同大の医師も、教員たちへの説明

会を開き、児童に説明する資料作りの助言をした。そして2学期。制服をスカートにし、名前も漢字の読み方を女らしく変えた。学年集会では、教員がスライドで経緯を説明すると、「やっぱり女の子なんだ」と納得する声もあがった。

今は、女の子の友達も増え、楽しく学校に通う。同大の精神科医の松本洋輔さんは、性別違和感を持つ子どもへの対応について「成長につれて違和感が消

える人もいる。違和感の強さをはじめ、本人の性格や交渉力、学校や家庭の状況を踏まえ、より良い環境作りを支援する必要がある」と話す。

心身が大きく変化する思春期の対策も欠かせない。性別違和感が強まり、不登校や自殺願望につながる。日本精神神経学会は、2012年に性同一性障害の診療指針を改定、男性らしさや女性らしさが表れる二次性徴が始まって間もない時期に、これを一時的に抑える薬物治療を認めた。治療を受ければ精神的に安定し、将来、性同一性障害と診断された後、ホルモン治療で容姿を希望する性に近づけやすい。

二次性徴が進んでしまうと、抑える効果はない。同大の産婦人科医の中塚幹也さんは「子どもが性別違和感を持つことに気付いたら、早めに性同一性障害の診療を行う医療機関や学校に相談してほしい」と呼びかけている。